

Interview #01

*2025年2月インタビュー

2025年2月所属：教育発達科学研究科 教育科学専攻
(名古屋大学融合フロンティアフェロー／日本学術振興会特別研究員／QTA)
2025年4月所属：鹿屋体育大学（講師）



教育発達科学研究科 菊地原 守 さん

これまでやってきた研究の概要を教えてください

世界的に、公立学校の教師に非正規雇用が増えています。予算や少子高齢化が背景となっているのですが、その点を雇用側と被雇用側の両面から深掘りして研究しています。例えば、非正規雇用の先生がどういう環境で働いているのか、不遇と思っているのかいないのか、なぜ働き続けていられるのか、といった内容です。また、それと並行して、共同研究で「教師の働き方改革」というテーマも進めています。

この春からはどういう仕事を予定ですか？

いわゆるアカデミックポジションで、体育の単科大学で講師をする予定です。体育学部の中では、人文社会科学と生命科学、武道で分かれているのですが、私は人文社会科学の専任教員として教育学を教えることになっています。まだ中に入っていないので分からないのですが、1学年200人くらいのうち8～9割は教職課程を履修するそうなので、4年間でほとんどの学生がわかるようになるかもしれません。ちなみに、就職して2年目、3年目はゼミや委員会の負担が増えると聞いているので、仕事に慣れつつも、博士論文は1年目で書き切ろうと考えています。

キャリアに関する考え方や、在学中に経験して良かったことは？

もともと大学教員とか研究職に興味はあって、ずっと遡ると学部生の「基礎セミナー」で教育学部の教授のところに入っていたことがきっかけです。その教授のもとで、少年院に話を聴きに行ったり、愛知県警に行ったりとか様々な調査をさせてもらったんです。そしてその教授から「今後は英語力が必要だよ」と言われ、「そうか、じゃあ行きます」って学部3年目の夏からシンガポールに1年間留学しました。そこで海外のアカデミックな世界に触れて、ものすごい刺激を受けこの世界に入りたいと思うようになりました。M1になるときには「大学の研究職に就く」と決めて論文も書いていたので、キャリアプランを考えるのは早い方だったと思います。また恵まれていたのは、お世話になっていた先輩が当時アカデミックで就活をしていたので、その様子をうかがいながら「自分のキャリアに何が必要か」を逆算できました。結論としては、アカデミックキャリアに必要なのは教育歴と研究歴の2つで、自分の場合は幸運なことこの両方がある程度実績をつけることができました。教育歴については、修士の時から中学校や高校で非常勤講師をする機会に恵まれ、そしてD1で専門学校や県内の大学で非常勤講師の話をしていただきました。非正規雇用の教員の研究をやっていたのもあって、フィールドワークみたいな形でもあったし、自分が教員免許を持っていてたまたま空いていたポストと合致したという形でもありました。いずれにしても、同世代の中では比較的、教育歴を積み重ねていた方だと思います。研究歴についても、先輩から「研究者としてやっていくなら査読に通せ」と言われていたのを意識し、卒論で書いていたものをM1の時に査読論文にまとめていきました。1つでも論文が通ると、学振でも共同研究でも存在感をアピールできると聞いていたので、ある程度戦略的に動いていた部分はあります。

キャリア形成にあたって活用したこと、在学中に経験してよかったことを教えてください。

「企業と博士人材の交流会」に参加させていただきました。アカデミア志望の私にとっても、もちろん貴重な機会でした。ただし、やはり参加企業は理系人材を求めている様子でした。特に私の研究の場合は教員の世界にはインパクトがあるものの、企業の利益とは関係が薄いので、難しさを感じました。社会的な価値があっても、経済的な価値は生み出しづらい。そのあたり、文系博士と企業とのマッチングは一筋縄ではいけないのが正直なところです。

また、学会については割と幅広く、教師教育学がメインでありつつ、教育社会学会、教育学会などにも積極的に参加していました。やはり良くも悪くも名大には名大のカラーがあるので、他の大学の様子を聞いたり、様々な外部の人と交流したりすることによって、幅広い経験を積むことができました。

後輩たちにエールをお願いします。

文系博士の場合だと、企業就職が難しくなる側面は確かにあるなと感じています。クリティカルシンキングや論理的思考力などのスキルは身につくんですけど、企業の求める人材と直接マッチするかどうかと言われると難しいところがあると思います。ただ、博士課程に進む人は、そのあたりの覚悟を決めている印象です。ちなみに、学部生から修士に進む場合は、周りの人を見ていても特にデメリットになっていません。いずれにしても、やりたいことを見つけたらとことんやるのがいいかなと思います。その一方で、金銭面やキャリアの面では、ある程度戦略的に、どうしたら研究費が獲得できるか、どうしたら仕事が回ってくるかといったことは視野に入れた方がいいです。また、もし自分の研究が経済的価値と直結していない場合でも、企業やスタートアップという形も有り得ると考えています。社会的価値の大きい研究を、社会に直接的に還元・実装していける点を考えると、アカデミックだけではない生き方もあるのかもしれない。自己満足にならず、論文や学会発表で、アウトプットしていきましょう。